

# なによりも 地球を美しく

CO<sup>2</sup> 削減、ダイ  
オキシン抑制

大幅な減容化

頑丈な作り

高地使用可

$\frac{1}{300} \sim \frac{1}{500}$

燃料代

電気代

不要

350L Model



**TOBPO**  
Tokyo Omotesando Brand Promotion Office

# W-MTD 磁気熱分解装置

## W-MTD

### 湿式排煙装置

湿式排煙装置は街中や船舶など排煙が出ると困る場所で活躍します。匂いや煙を水で洗い流し外へは出しません。しかし、装置を稼働させるための電力が必要となります。

600L Model

350L Model

1300L Model

350L Model

処理物投入  
ボックス

磁気ノズル

磁気ノズル

処理灰取出口  
(反対側にもあります)

## 技術概要

W-MTD は、炉内に送られる僅かな空気と磁力とが、磁気発生理論に基づく反応を起こし高エネルギー状態となることで、炉内の有機物を燃焼させることなく、原子の状態までバラバラに分解することで、処理を行います。

一部、稼働の際、挿入される空気の量が多い場合は多少の炭化が生じますが、その炭化した処理物を再投入して再度分解させることにより粉体となり、処理灰として炉内に残ります。

稼働初期時に僅かな加熱を要しますが、分解反応の熱源に関しては電気、化石燃料などを必要としません。

これは、初期に加熱した有機物が炉内の処理灰に接触することで、有機物の分解が連鎖的に起こり、投入物自体が磁気を帯びた処理灰となり、発熱を起こすためです。

分解の進み具合を見て、処理物の投入を続ける限り、分解反応は続くのでランニングコストは一般の焼却炉に比べ非

常に低コストです。

また、CO<sup>2</sup> の排出に関しても化石燃料を使用しないため環境にも優しいです。

この W-MTD は有機物全般の処理が可能で、投入物は無分別で差支えありません。プラスチック、紙、樹脂製品、木材など分別無しで投入できます。ただし、含水率が高いもの、生木や野菜くずはそのまま大量に投入してしまうと稼働しづらく、稼働しても処理時間が長くなりますので、炉内に投入する際には、含水率を 20%以下程度にすることが良いと考えます。

投入物は、分解され減少するにつれ、連続的に投入でき、最終的には 1/300 ~ 1/500 にまで減容化されます。

また、無機物は分解されませんが、ビニールに巻かれた電線や、金具混じりのパソコンなども投入は可能で、その内の有機物は分解され、無機物は処理灰に混ざって下に落ちますので、後で篩いにかけて取出せば良いと考えます。

# 世界中で問題の廃プラ解決方法

W-MTDでダイオキシン、CO<sup>2</sup>の排出を抑制します。(24時間稼働可能)

## 特徴

- 1, 本体は磁気発生理論を活用した装置です。本体は焼却炉ではありません。ダイオキシン、CO<sup>2</sup>の排出を抑制します。
- 2, 運転・稼働時は一切の電力、化石燃料を使用しないで処理でき、経済的です。
- 3, 廃棄物の量を 1/300 ~ 1/500 に削減できます。
- 4, 本体には一切のメーター、スイッチなどの計器はありません。洪水などで水没し、泥だらけになっても、綺麗に水洗いし、乾かせば元通り使用できます。
- 5, 環境に応じて、どこへでも移動と設置ができます。船舶でも OK です。

## 焼却炉との違い

燃焼データによりますと燃焼は酸素濃度 16% で急速に衰え 15% で完全に消失します。また、酸素濃度が 16% 以上でも不完全燃焼により黒煙など有毒ガスが発生します。そのため、一般焼却炉では排気ガスの再燃焼をしなければなりません。また、多量の燃料を使用するため、多額な費用と多量の炭酸ガスを排出する事になります。当 W-MTD は電気や燃料は必要なく、焼却炉では無いため、海拔実験で酸素濃度 11.13% (海拔 5,000m) でも稼働します。排煙量は実に少なく炉の 10% 以下で殆どが水蒸気です。特に 1300L モデルは運転が安定すると空気は殆ど不必要な

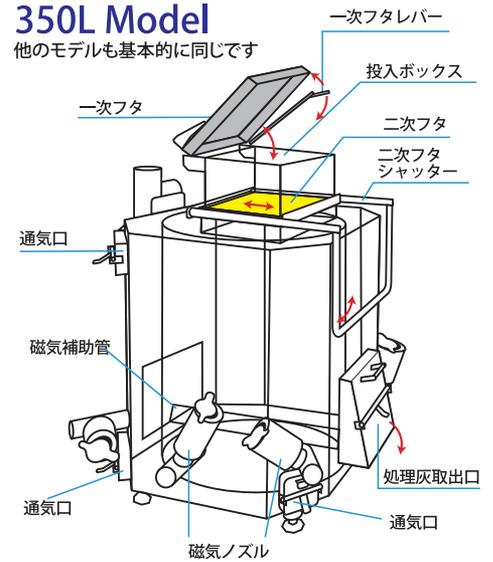
ため空気取入れ磁気ノズルは全閉し、この状態で処理物により多少の差はありますが、順調に稼働します。

## 磁気熱発生理論について

磁気熱発生理論は 1933 年、シュレーディンガーと共にノーベル物理学賞を受賞したポール・ディラック博士がモノポールおよびゼロポイントエネルギー理論を発表しました。この理論は難解すぎて、当時の物理学会は無視しましたが近年になって、ようやくほんの一部ではありますが、知られてきました。この理論などを元にして磁気熱分解装置は生まれました。

## 350L Model

他のモデルも基本的に同じです



## ○ 処理できるもの

生活ゴミ・紙おむつ等の難燃物・ゴム製品・木材・プラスチック等の石油化学製品・動植物性残渣・農業廃棄物・工業廃棄物・漁網・牛豚鳥の糞・その他

有機物であれば、基本的にどんなものでも処理可能ですが、処理物によっては同じ処理物だけの投入より、一定の割合での混合投入が、より良い処理状態を作ります。専門オペレーターを決定していただき、事前に 2 日程度の実施指導をいたします。

## × 処理できないもの

金属類・ガラス類・陶磁器類・土砂・液体など

含水量が多く水分がしたたり落ちる物の処理はできません。生木や野菜くず、草、植物、動物糞など含水率の高いものは乾燥させてから処理して下さい。また、炉内の状態や投入量によっては生ゴミだけのものは処理できない場合もあります。処理物によって処理時間が変わります。

## 注意項目

- 1, 水が滴る処理物は乾燥させる。
- 2, 処理できるものは有機物です。
- 3, 長いものは破碎するなどして入れてください。
- 4, 処理時間は処理するものによって変わります。
- 5, 性能を維持するには 1 ヶ月に 1 度の点検をおすすめします。
- 6, 安全性のため、装置の蓋は同時に開けないで下さい。空気が入り、炎が上がります。
- 7, 別売の排煙装置は湿式で電力が必要です。必要な薬品は家庭用洗剤で OK です。

W-MTD は焼却炉とは根本的に処理理論が異なっているため、排気温度も極端に低温で 100℃ 以下です。

排出ガス中の有害物質も極端に少なく、また、処理後の残渣量も焼却炉 1/10 に対し 1/300 ~ 1/500 の量です。焼却炉灰は 2 次処理溶解しても減少率は 1/15 程度ですから、W-MTD は溶解より遥かに残渣の量が少ないだけでなく、残渣中の有害物質も極端に少なく焼却炉では達成不可能な高性能さを発揮しています。埋立地の問題で現在、ご使用中の大型焼却炉から出る残渣を W-MTD で再処理し、残渣を少なくする事も一つの方法と考えます。

# W-MTD (磁気熱分解装置)



## 参考資料

磁気熱分解装置W-MTDはダイオキシン類対策特別措置法の特定施設や、煤煙発生施設に該当しないため、排出ガスに対し基準は設けられませんが、参考として同法上の廃棄物焼却炉（規模の小さい焼却炉）における排出基準を下表に示します。参考として当社が販売する磁気熱分解装置W-MTDの排出ガス等の測定値を表示しました。

廃棄物焼却炉の排出基準			磁気熱分解装置	
特定施設（ばい煙発生施設）	項目	単位	排出基準	当社データ
*1（火床面積が0.5㎡以上又は処理能力が50kg/h以上） *2（火床面積が2㎡以上又は処理能力が200kg/h以上）	排ガス中ダイオキシン濃度	ng-TEQ/m <sup>3</sup>	5	0.061~0.27
	ダスト濃度	g/m <sup>3</sup>	0.15	0.0049
	硫酸酸化物濃度	ppm	0.11	0.001
	硫酸酸化物量	m <sup>3</sup> /h	0.16	0.00034
	窒素酸化物濃度	ppm	250	77
	塩化水素濃度	mg/m <sup>3</sup>	700	34
	処理残渣中ダイオキシン濃度	ng-TEQ/m <sup>3</sup>	3	0.043~0.19
平成26年1月27日測定				

当社が販売する磁気熱分解装置（W-MTD）は焼却炉とは根本的に処理理論が違います。排気温度も極端に低温で100℃以下です。故に環境省が定めている焼却炉の理論は成立しません。排出ガス中の有害物質質量も極端に少なく又、処理後の残渣量も焼却炉1/10に対し1/300~1/500の量です。焼却炉の灰は2次処理熔融しても減少率は1/15程度であり、磁気熱分解装置は焼却処理より遥かに残渣の量が少ないだけでなく、残渣中の有害物質も極端に少なく焼却炉では達成不可能な高性能さを発揮しています。

600L・1300L仕様の装置は最初の稼働時にボルトを外し、装置一杯に処理物を入れる事が出来ます。以後、連続投入が可能です。



この様な浜辺が蘇る

世界中で問題の廃プラ簡単解決方法

